

飛鳥地域の漆工と漆の流通

－飛鳥京跡の漆容器から漆の運搬と貯蔵を考える－

清岡 廣子

I. はじめに

飛鳥・奈良時代の漆工品には法隆寺の玉虫厨子や正倉院宝物等の優れた工芸品、終末期古墳の漆棺、乾漆像などがあり、当時の漆工技術水準の高さが窺える。その製作には塗料である《漆》が多量に使用されたことは明らかで、都城、官衙、寺院やそれらの関連遺跡などで工房跡と推定できる遺跡（地区）も存在しており、当時の漆工形態の一端を垣間見ることができる。

飛鳥地域では、特に飛鳥池遺跡と紀寺跡で漆工製作用具や漆の付着した土器などが出土しており、漆工房の存在が明らかにされている。この漆付着土器は須恵器、土師器の坏・皿・鉢・壺・瓶・甕などあらゆる器種にわたるが、坏・皿類は塗布の際のパレットとして、壺・瓶類、鉢類、甕類は漆液の貯蔵・精製に関わる《容れ物》として用いられており、その当時の漆工の復元に際して重要な資料となっている。

一方、律令期には漆の貢納が規定されており、特に壺・瓶類は各地から宮都へ漆を運搬するための運搬容器としての使用が明らかにされていることから、漆容器は律令期の漆の流通形態を考える際にも重要であり、それらの土器の産地同定によって漆の貢納国が特定されることが想定され、漆容器は漆の貢納制の実態をも示すものといえる。

本稿では漆容器の出土が集中的に認められた飛鳥京跡1998—20次の漆容器を取りあげる。工房との関連性が示唆され、漆の付着状況や遺存度から漆の貯蔵保管方法や運搬方法などが復元できる資料であることから、飛鳥京域の漆容器の器種構成を明らかにし、漆の流通、消費形態の復元について考えていきたい。

II. 飛鳥地域の漆工房

明日香村内では漆付着土器の出土が時折認められ、漆工房は飛鳥池遺跡と紀寺跡で確認されており、飛鳥京跡との比較から先に整理しておく。

a. 飛鳥池遺跡

明日香村大字飛鳥の旧溜池・飛鳥池に所在し、2001年に史跡飛鳥池工房遺跡となる。1991年と1997～2001年の調査で、金、銀、銅、鉄、ガラス、玉、漆という多業種の工房が狭量な谷部に営まれたことが明らかとなり、7世紀の最先端技術が集約された総合工房遺跡であることが判明した（奈文研1992、1998、1999、2000、2001）。ここでは製作を示す漆篋、漆刷毛、漆皿、漆容器が出土している。未製品やベッコウや玉など各種宝飾素材もあり、漆工房では他工房と連携して素地から塗りまで一貫した製作をおこなったと想定される。漆容器には細頸壺、平瓶、短頸壺、長胴瓶、德利形瓶などがあり、飛鳥Iと飛鳥IV～Vに位置付けられる。德利形瓶は漆専用容器の可能性も示唆されている。長胴瓶などに縄、網籠が付着遺存したものがあり、運搬の状況が窺える。多彩な土器群は産地差等を示しており、平瓶には東海地方産と同定されたものがある。今後、遺跡内での工房形態や土器様相等がより明らかになれば飛鳥時代の漆工の実態が判明するのではないかと考えている。

b. 紀寺跡

明日香村大字小山に所在し、藤原京左京八条二坊に占地する。寺域東南部に寺院造営工房の存在が推定されており（奈文研1988）、鍛冶・鑄造工房に付随して漆工房が営まれたことが、製作を示す漆篋、漆刷毛、濃し布、漆皿、漆容器や、漆容器の木栓・蓋の出土から明らかにされている。濃し布は工房での最終的な漆の精製・調整を示す遺物であり、製作の実態を窺うことができる。漆容器には平瓶、長頸壺、細頸壺、長胴瓶、横瓶などがあり、飛鳥Ⅳ～Ⅴに位置付けられる。平瓶、長頸壺には東海地方産と同定されたものがある。

Ⅲ. 飛鳥京跡の漆容器

飛鳥京跡は明日香村大字岡一帯に広がる宮殿跡であり、下層遺構は飛鳥板蓋宮、上層遺構は飛鳥浄御原宮と推定される。これまでにエビノコ郭や京域東側周辺で漆附着土器が散見されている。飛鳥京跡1998-20次調査では、楕円形土坑が並立した状況で検出され、総数400点程の漆容器が出土している（明日香村2000）。そのうちSK02、SK03、SK04、SK06、SK08、SK09の6基から遺物の出土があり、特にSK08、SK09で全出土数の50%を占め、短期間で多量に廃棄した状況が窺えた。パレット類や漆篋漆刷毛等の実態を示す遺物がなく、工房の存在を確認できないが、共伴遺物にはベッコウや砥石などもあり、工房との関連性が高いことが示唆される。

a. 器種分類

漆容器には、平瓶、長頸壺、長頸瓶、短頸壺、細頸壺、長胴瓶、短頸瓶、広口瓶、広口細頸瓶、徳利形瓶、横瓶、甕類などがある。主な器種は平瓶、長頸壺、短頸壺、長胴瓶で、大概の割合を示すと60%、15%、5%、5%となり、その他の壺・瓶類はそれ以下で、1%にも満たない程度である。器種分類には口縁部形態による分類を使用しているが、特に長い胴部をもつものに対して、ここでは《瓶》とした。第1～4図には最も多く出土したSK09出土資料を中心に、その他の土坑等で特記すべきものについて提示している。

平瓶（1～37） 出土数は最も多く、全体の6割を占める。側面観では偏楕円形と逆台形、底部形態では丸底、平底に大別される。さらに肩部形態で丸みを帯びたものや肩の張るものなどにわかれ、部位の形態に豊富なバリエーションを有する。口頸部は直口するもの、漏斗状のもの、外反するもの等がある。三段成形が多く、円盤閉塞のサイズにも大小がある。開口するものや搾りきるものもみられる。体部器面調整ではカキメやナデ調整、底部調整ではロクロケズリと手持ちケズリがみられ、タタキ痕を残すものもあり、底面には格子タタキ（20）や円弧文タタキ（21）のような成形痕跡をもつものもある。器面にはヘラ描きを有するもの（10・19・20）が認められる。体部上半には自然釉が降着するものが多くみられる。多少のばらつきはあるが、胴径11～18cm、体部高7～10cm前後のものが多く、容量はある程度規格化されているようである。口径7～10cm、口頸部高に長短が認められる。破断面には漆が付着しており、漆液が器内に詰まっているもの（2・4・6・9・11・13・17・19・21・22・26・28・33・35）や、木蓋・栓が遺存するもの（1・11）やそれらの痕跡が遺存するものがある。縄が遺存するもの（12・16）や、網籠の痕跡が残存するもの（7・13・22・28・29・35）がみられる。体部には漆を取り出す際に穿たれた打撃痕や、口縁端部の打ち掻きや割り揃えも認められる。多種多様な形態と整形手法、胎土をもつことから様々な産地が想定される。

長頸壺 (39~54) 長頸の壺K (奈文研分類) である。出土量は全体の1割を占める。高台の有無で2種に大別される。

長頸壺A (46~54) は台付で、偏楕円形、逆台形、算盤玉状を呈し、底部形態では丸底と平底に、さらに肩部形態で丸みを帯びたもの、肩の張るもの等にわかれる。高台の形態にも差異がある。胴部には沈線、刻目文、列点文、波状文などの装飾帯がみられる。底部調整ではロクロケズリと手持ちケズリがみられ、タタキ痕を残すものもある。胎土も様々で色調には青灰色、灰白色、赤褐色 (53) 等がある。胴径11~17cm、器高20cm前後であり、やや大小が認められる。

長頸壺B (39~43) は無台で、偏球形を呈し、細頸で直口的な口縁部が取り付く。底部形態では丸底と平底に、さらに肩部形態で丸みを帯びたもの、肩の張るものなどにわかれる。胴径11~13cm前後と台付の壺よりはやや小振りである。

長頸壺は多種多様な形態、胎土をもつ。口頸部には直口するもの、外反するもの、有段のものなどがあり、その接合には円盤閉塞するものと開口するものがある。体部上半に自然釉が降着するものが多い。木蓋・栓が遺存するものやその痕跡が認められるものがある。漆液が器内に詰まっているもの (39~41・43) や、漆液の流出状況を留めるものもある。漆液を取り出す際の打撃痕や口頸部の打ち搔き、割り揃えもみられる。

長頸瓶 (55~57) 長頸の口縁部に長胴で平底を呈すものを瓶として設定する。特に胴部に沈線帯の巡るものが抽出された。肩部形態の差で2種に大別する。

長頸瓶A (57) は卵形を呈し、水瓶に相似する形態と思われる。口頸部には引き搾り痕がみられ、カキメを有する。体部には2条沈線が4帯巡る。底部と口縁端部は欠損する。胴径15cm。

長頸瓶B (55・56) は砲弾形を呈し、奈文研分類の壺Pに類似する形態で、祖形になるのではないと思われる。口縁部は外反し、頸部に段を有する。体部には2条沈線が2帯巡る。55は胴径15cm。断面に漆が付着する。口縁端部欠損、割り揃えがみられる。SK04ほか出土。56は胴径15cm。底部と口縁端部は欠損する。漆が付着している。SK08、SK09出土。

短頸壺 (58~64) 短口縁に球形状の胴部をもつ壺である。底部形態は丸底と平底にわかれ、口縁部形態、胴部最大径の位置などに差異がみられる。底部調整にはロクロケズリと手持ちケズリがあり、形態や胎土の違いは産地差を現わす。口縁端部には打ち搔き痕がみられる。58~60・62は肩部に沈線を巡らし、61にはヘラ描きがある。58には木蓋が遺存している。木蓋径5cm。口縁内法にあわされている。64には頸部に縄が巻き付いている。58・60・62~64には漆が器内に詰まっている。口径6~8cm、器高8~12cm、胴径12~14cm。58はSK08出土。

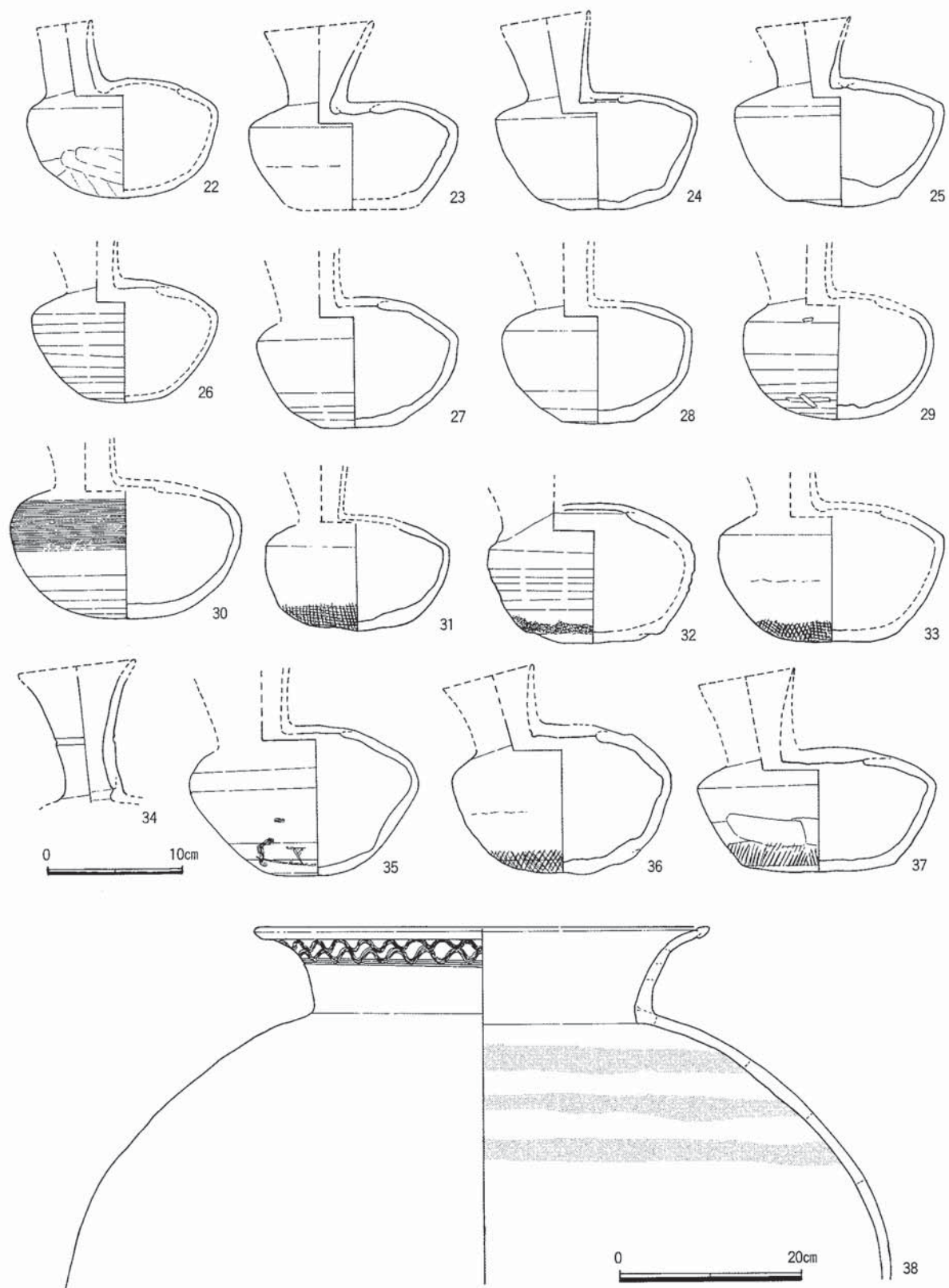
細頸壺 (65・66) 広口細頸で球形胴をもつ壺である。65には木蓋が遺存しており、頸部で閉口されている。網籠の痕跡を残しており、透漆 (黒色) が付着している。口径9cm、木蓋径5cm。66はやや長胴気味の胴部をもつ。口径6cm、器高15.5cm、胴径12cm。

短頸瓶 (67) 狭口の短口縁と偏球形~卵形のやや長めの胴部をもつ瓶である。未使用の漆液が廃棄されたことが残留漆の状態から窺える。軟質焼成。口縁端部には打ち搔き痕がみられる。口径7cm、器高14.5cm、胴径13cm。

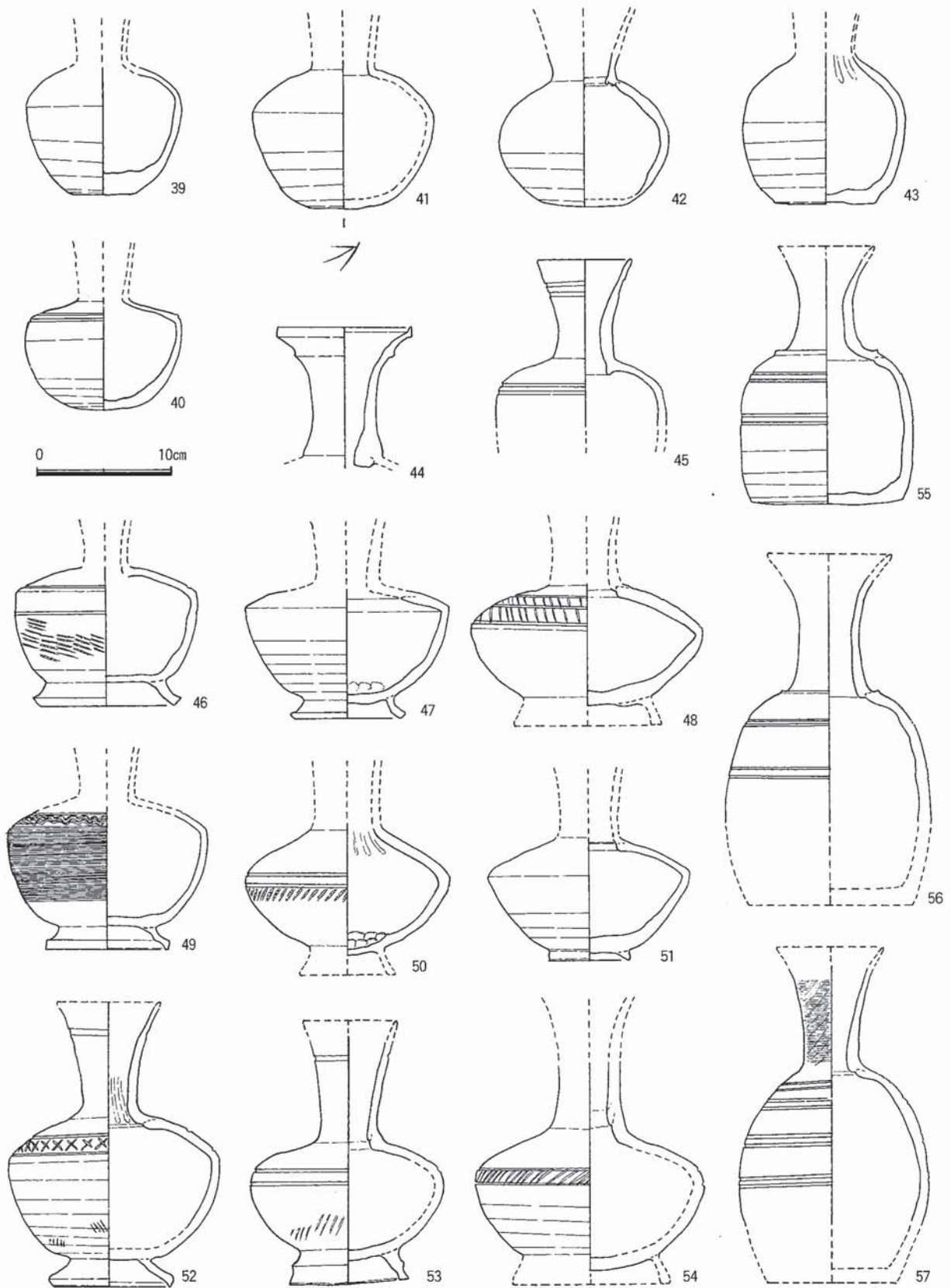
長胴瓶 (68~72) 口縁部形態が不明であるため胴部形態で設定している。平底を呈すものが多い。口縁部形態が判明すれば長頸瓶、細頸瓶、広口短頸瓶等に分類できると考えている。肩部は丸みを帯びたものと明瞭な稜をもつものがあり、胴部最大径の位置により形態差が認められる。底部調整には手持ちケズリが多く、軟質焼成のものもみられる。網籠の痕跡を残すもの (69・70・72)、漆液が付着遺存するものもある。底径5~8cm、復元体部高10~16cm。



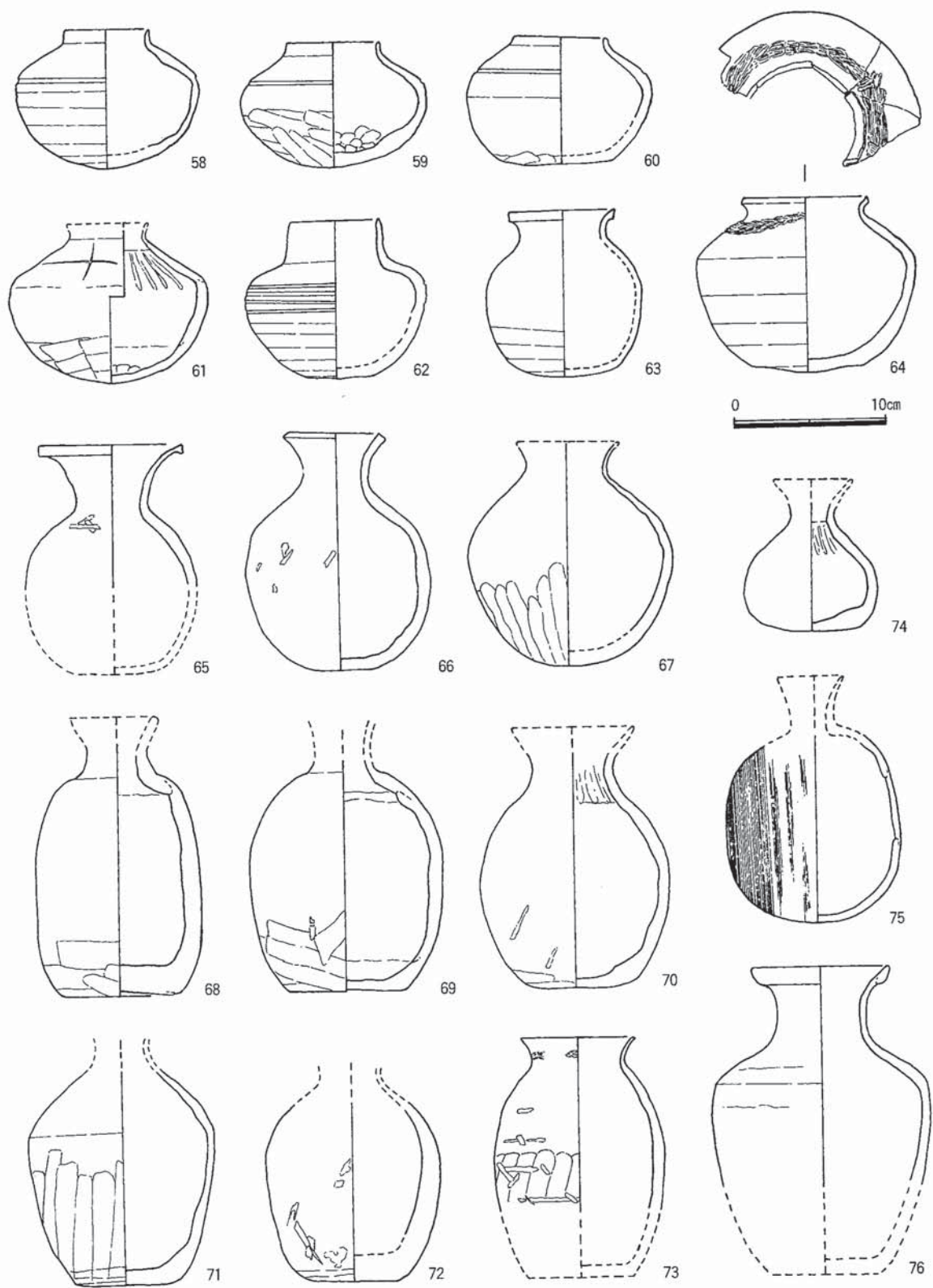
第1図 飛鳥京跡の漆容器① (1:4)



第2図 飛鳥京跡の漆容器② (1:4) (38のみ1:6)



第3図 飛鳥京跡の漆容器③ (1:4)



第4図 飛鳥京跡の漆容器④ (1:4)

(1~54・56・57・59~72: SK09、55: SK04、57・58・73: SK08、
75: SK02・SK03、55・74・76: 土坑上部堆積層)

広口瓶 (76) 広口で肩のはる長胴の瓶である。口縁部は受け口状を呈し、底部は欠損するが、平底をなすものと想定する。土坑上部堆積層出土。口径8cm、胴径14.4cm。

広口短頸瓶 (73) 広口で短頸のくの字状の口縁部と筒状の長胴の瓶である。底部は欠損するが、平底を呈するものと想定される。白灰色で、軟質焼成。口縁端部には打ち搔き痕がみられる。縄や網籠の痕跡が遺存する。SK08出土。口径7.6cm、胴径11.2cm。

徳利形瓶 (74) 細頸で下腹部が膨らんだ形態をもつ酒器に相似する瓶である。甕との類似性も示唆される。口縁部は欠損しているが、短頸と想定される。灰白色で、灰被りがあり、透漆が付着している。土坑上部堆積層出土。胴径9cm。

横瓶 (75) 小型で他の壺瓶類と同様の製作手法をもつ。片面に円盤閉塞を施す。カキメ、ナデ、ケズリ調整。SK02、SK03に分割されて出土した。口縁部欠損。胴径11.3cm。

特大甕 (38) 口頸部に波状文が巡る。口径50cm。体部上半内面に3条ほどの赤茶色(透漆)の漆付着帯が残存している。漆液の大量貯蔵と液量の増減があったことは明らかで、この場所での一定期間の貯蔵が窺える。このほかに中型甕も数点みられる。

b. 漆容器に採用される貯蔵具

このように飛鳥京跡では多様な漆容器がある。飛鳥池遺跡で示唆されたように、漆液を容れるに適した壺・瓶類として細頸や狭口の壺・瓶類が選ばれ、運搬にも小型の壺・瓶類が適していたことを当出土資料からも裏付けられる。

器種は平瓶が圧倒的に多く、そのことは飛鳥地域に限らず、どの地域でも一般的にみられる器種が漆容器として採用されたことを示している。それら容器の品質も良好なものばかりではなく、平瓶の器面調整でも特異なものもみられ、漆の運搬を窺せる網籠の痕跡を留めるものもあり、運搬具であったことを首肯するものである。

運搬の具体相を示すように徳利形瓶や多種多様な口縁部をもつ長胴の瓶類などの特異な器形をもつ壺・瓶類が認められる。徳利形瓶は飛鳥池遺跡や藤原京域で散見され、飛鳥京跡でも1点出土している。現状で漆付着のものが多いため専用容器とも示唆されるのであろうが、現状では是非判断はつきかねる。

飛鳥京域では長頸、広口、広口短頸等の長胴の瓶類が多く出土しており、飛鳥池遺跡では広口短頸瓶等の長胴瓶、紀寺跡でも細頸瓶を有している。これら長胴の瓶は口縁部形態が多様なことから地域差なども勘案すべき器種とみられ、こちらに漆を専有的に詰める容器としての重点がおかれたものと考えられ、“漆容器”としての設定ができるものと想定している。

c. 漆容器の時期と産地

飛鳥京跡の漆容器は飛鳥池遺跡、紀寺跡とほぼ同時期の7世紀後半であることをすでに示唆している。しかし、飛鳥京跡では食膳具は全出土遺物の1%程度で、時期決定の根拠となる食膳具がないこと、飛鳥地域の貯蔵具の様相が不鮮明であること、各土器生産地間の形態変遷の差異と同時期性などが憂慮されることから、詳細な時期決定については慎重に期したい。

漆容器は色調、胎土、焼成、技法で様々にわかれ、多彩な産地が想定される。飛鳥池遺跡、紀寺跡では東海地方産と同定された容器があり、それらを参考にすると飛鳥京跡にも東海地方産の漆容器が一定量存在していることがわかる。特に湖西産が多いように思われる。ほかには播磨産や備前産等も有すると推定しているが、多くの壺・瓶類で産地同定にいたっていないのが現状である。

IV. 漆の運搬と貯蔵方法

飛鳥地域で出土した漆容器は、飛鳥時代の漆の運搬から消費までの工程を復元するために重要な資料を提供している。飛鳥京跡では小型の貯蔵具類と大甕や甕類が出土しており、小型の貯蔵具類に容れられ運ばれてきた漆液を大甕や甕類に入替え貯蔵していたことが示されている。漆の流通過程として漆の採取⇒運搬⇒貯蔵⇒消費という基本的な流れがあり、律令期には貢納品であったことから、採取から消費までの流れも複雑であることが予想される。ここでは飛鳥京跡の漆容器から器内外面の漆の付着・残存状況、蓋・栓、縄・網籠などの遺存状況を明らかにし、漆の貯蔵と運搬について考えていきたい。

a. 漆

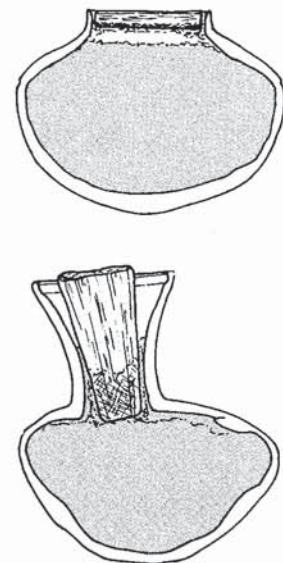
塗料として使用される漆は樹液であり、採取した漆液にはゴミが混入しており、精製して塗料として使用できる状態がつくられる。漆液はその状態により生漆・透漆・黒漆に大別される。生漆は採取した漆液からゴミを取除した状態の漆液で、主に下地用として用いられる。採取したときには乳褐色で、乾くと黄褐色系の漆となる。透漆は精製漆で、中塗りと上塗りに用いられる。生漆にクロメ（天火で温めること）とナヤシ（粒子を均質にすること）をして精製し、褐色系の透明な漆液とする。最も使用頻度の高い漆液であり、精製度合も様々である。黒漆は色漆で、上塗りに用いられる。透漆に松煙、油煙を加えて黒色漆とする。基本的に運搬される漆は生漆か透漆であり、工房で最終調整がなされる。飛鳥京跡の漆容器に付着遺存する漆はやや色、質の差があるものの、生漆、透漆が圧倒的であり、よく符号する。

b. 漆の運搬と貯蔵

漆容器の縄・網籠、蓋・栓などの付着物や、容器内の付着漆・残存漆、容器の使用痕跡から漆の運搬と貯蔵状況が窺え、漆の取り出し方法が復元できる。

【縄・網籠】 縄は平瓶（12・16）、短頸壺（64）、広口短頸瓶（73）に遺存しており、頸部周辺に巻かれている。編籠は平瓶（7・13・22・28・29・35）、細頸壺（65）、広口短頸瓶（73）、長胴瓶（69・70・72）に遺存しており、平瓶には底面にも付着したもの（7・13・35）がある。これらを総合すると、底部（底面）から体部上半（口頸部）まで竹や蔦のような植物性の繊維の紐で縮まれた網籠で器体は包まれていたことになる。これにより運搬の際の梱包状況が窺え、器体を網籠で包ませ、頸部を縄で搾って運搬されたことが復元できよう。

【蓋・栓】 飛鳥京跡では容器の木蓋、木栓、布栓が出土しており、容器に付着遺存した壺・瓶類や、口頸部に付着した漆に木蓋や木栓の痕跡が残存するものなどの存在から閉口方法がわかる。短頸壺（58）や細頸壺（65）には蓋が採用されている。短頸壺は口縁内法に合致することから、入れ子状に閉口されたようである。細頸壺は広口であり、やや狭まった口頸部内面に落とし蓋状に閉口している。平瓶は蓋と栓（1・11）が、長頸壺も蓋と栓の両方が使用されている。蓋は短頸壺と同様である。栓は口頸部に合わせられるが、隙間が生じる。このため、器口に布をあてがい、その密封度を高めていることが蓋・栓に布やその痕跡が遺存するものから復元できる。布着せをした栓も同様である。蓋や栓は運搬、貯蔵双方に使用された事実を物語る。



第5図 漆容器の使用方法

【漆容器の使用痕跡】 漆容器を観察すると意図的と考えられる使用痕跡を有することが認められる。運搬されてきた漆を取り出し、甕に入れ替え保管する際の痕跡が飛鳥京跡の漆容器からは窺える。消費に伴う分配に際して、内容物の入れ替えも行っていると想定している。平瓶、長頸壺の多くは口縁部と体部に分割されている。これは容器の特徴でもあるが、漆液を入れるのに適した結果である。体部には打撃痕をもつものがあり、漆液を取り出す際の痕跡とみられる。体部上半と下半に穿たれるが、それで容器は破碎される。多くの容器は口縁部に割れ、欠けや打ち搔き、割り揃えがみられ、漆液を取り出す際に乾いて出しにくくなった蓋・栓を除去するためにおこなわれたものであることが窺える。

【付着漆・残存漆】 容器の内外面に漆が付着しており、生漆、透漆、黒漆がある。運ばれた漆の多くは生漆か透漆である。漆には薄い塗膜のみのもの（透漆、黒漆）と皺状の薄い塗膜をつくるものがある。器内に残存した漆は表面皺状をなし、充填されたままの状態のものがみられる。それらの多くは貯蔵されたまま未使用で廃棄されたものと思われる。断面に漆が付着しているものの多くは機能時、漆取り出しの際の痕跡であろう。廃棄段階の容器破損によって付着したものもある。

飛鳥京跡では残存漆塊を多量に有しており、容器の破片や網・網籠、蓋・栓が混入しているものもみられ、廃棄時の状況を示唆する。工房では容器内の漆液の搔き取りをおこない、残らず使うことが多いのに対して、飛鳥京跡では未使用漆である漆の残留度があまりにも高い。これは飛鳥京跡の漆の保有量を指し示す。

c. 漆工房での精製と消費

飛鳥・奈良時代の漆工芸品は透漆か黒漆で塗立てられている。工房で最終的な漆液の精製が行われており、鉢・盤や濃し布は精製課程を示している。紀寺跡での濃し布の出土はそれを裏付ける。漆塗りには必要量の漆液を小皿に取り分けており、土師器、須恵器の坏類がパレットとなる。漆塗り作業中には漆皿の漆液の蓋紙として反古紙が使用され、それが漆紙文書と呼ばれる文書資料である。それに少量の貯蔵と運搬を示す壺・瓶類が加わるとともに、大量貯蔵の甕類が工房での基本的な構成となる。飛鳥池遺跡で出土した様々の遺物から奈良時代の漆工技術へと至る過程の飛鳥時代の加飾技法、漆工技術が推量される。飛鳥地域の消費形態については飛鳥池遺跡の様相が今後より明らかになるとさらに深化すると思われるが、7世紀後半代の漆工の状況は判明しつつある状況といえよう。

d. 飛鳥地域における漆の流通

現在、飛鳥・藤原地域で漆付着土器が広く散見される状況から、相当量の漆が当地域に供給された実態を示している。飛鳥池遺跡、紀寺跡のように工房の存在が明確な遺跡での様相と飛鳥京跡での様相には遺跡性格の差異などから若干の開きがでてくる。工房では最終的な消費形態を示している。それに対して飛鳥京跡では工房関連の遺物も出土しているが、漆の保有量が高く、集配センターのような施設であると推定している。飛鳥京跡での残留漆塊の多さは、漆の利用度と漆の貯蔵管理能力が比例するものではないことを示し、貢納等で運搬されてきた漆液の貴重度を官人層が認知していたのか疑問視されるが、運搬されてきた漆を保管し工房へ漆を分配する都での漆の流通形態の一端を示すものである。生産地、消費地双方のさらなる流通形態、消費形態の解明が今後注目される。このように飛鳥京跡では漆の流通と消費形態の復元の基礎資料となろう。

V. おわりに

ここまで飛鳥京域の漆容器の器種を明らかにし、漆の運搬と貯蔵について考えてきた。特に飛鳥地域の漆容器の様相、特に7世紀後半の様相については、飛鳥池遺跡、紀寺跡、飛鳥京跡の資料によって大概判明したものと考えている。漆容器には様々な土器産地を有していることは明らかで、漆の原産国の特定に一助をなしているが、土器産地の特定は極一部しか為されていないのが現状である。さらに消費地で土器産地＝漆産地とすることはできない。漆の産地の特定には土器流通圏を視野に入れなければならないが、容器として採用された土器自体の流通形態も複雑であることが予想され、器物として飛鳥地域に貢納・運搬された貯蔵具のなかで、漆容器として転用された可能性も示唆されよう。一方で、土器様相が特殊で雑多であることが飛鳥の特質であるとされており、漆容器はその事実を如実に現わしている。

飛鳥地域での漆容器の多量出土は、即、飛鳥地域での漆の使用頻度の高さを示すものであり、当地域で漆の需要度が強まったことで一定量の漆の供給を賄うべくその体制を整えたことが漆の貢納制の規定と考えられる。飛鳥地域において漆の需用と供給の関係は、今後個々の遺跡での使用頻度と技量や管理能力の差が反映される可能性も示唆されよう。飛鳥地域の漆の流通形態および消費形態の一端は復元できたものと思われる。

〈参考引用文献〉

- 飛鳥資料館2000 『飛鳥池遺跡』飛鳥資料館図録第22冊
明日香村教育委員会2000 『明日香村遺跡調査概報 平成10年度』
橿原市教育委員会1995 『図録 橿原市の文化財』
金田明大2000 『宮都出土の東海産須恵器』『須恵器生産の出現から消滅』東海土器研究会
古代の土器研究会1997 『古代の土器研究 律令的土器様式の西・東5 7世紀の土器』
古代の土器研究会1997 『古代の土器研究5-1 7世紀の土器 (近畿東部・東海編)』
古代の土器研究会1998 『古代の土器研究5-2 7世紀の土器 (近畿西部編)』
古代の土器研究会2001 『古代の土器研究 律令的土器様式の西・東6 須恵器製作技法とその転換』
古代北陸土器研究会1999 『古代北陸土器研究第8号 つほとかめ』
古代北陸土器研究会2001 『古代北陸土器研究第9号 つほとかめのつくり方』
西口壽生1993 『飛鳥地域の須恵器』『古代の土器研究 律令的土器様式の西・東2 須恵器』古代の土器研究会
巽淳一郎1992 『平城宮・京出土須恵器の分類と産地同定』奈良国立文化財研究所
玉田芳英1995 『漆付着土器の研究』『文化財論叢Ⅱ』奈良国立文化財研究所創立40周年記念論文集刊行会
東海土器研究会2000 『須恵器生産の出現から消滅』
奈良県万葉文化振興財団2001 『飛鳥池工房』(奈良県立万葉文化館展示図録)
奈良国立文化財研究所1988 『飛鳥藤原宮発掘調査概報18』
奈良国立文化財研究所1992 『飛鳥藤原宮発掘調査概報22』
奈良国立文化財研究所1998 『奈良国立文化財研究所年報1998-Ⅱ』
奈良国立文化財研究所1999 『奈良国立文化財研究所年報1999-Ⅱ』
奈良国立文化財研究所2000 『奈良国立文化財研究所年報2000-Ⅱ』
奈良文化財研究所2001 『奈良文化財研究所紀要2001』
大和郡山市教育委員会1989 『平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告』